

——開智国際大学の前身は女学校だと聞きましたが。

「大学の前身は一一〇年余の歴史を持つ日本橋女学館で、東京・日本橋の商家の子女教育を担い、秘書教育や英語教育に力を注いでいました。それが、短期大学が全盛だった頃の一九八七年に、ここ柏地区に日本橋女学館短期大学を創設しました。二〇〇〇年に男女共学の四年制大学に移行し、日本橋学館大学になりました。二〇一四年に開智学園との合併を前提に提携し、一五年に開智国際大学に名称変更、一七年四月、開智学園と日本橋女学館の合併を経て、教育学部と国際教養学部を新設しました。教育者である本学の青木理事長のご協力の下、今では

アクティブ・ラーニングという言葉で親しまれていますが、本学では以前から探究型教育を進めてきました。合併を踏まえ開智学園の教育の考え方を採り入れ、実践していくことになりました」

——開智学園の教育の考え方は。

「二〇一五年のノーベル生理学・医学賞を受賞し、開智学園名誉学園長である大村智先生が開智学園の名付け親です。先生は、二二世紀を生きる若者は人類が直面している諸問題の解決に向けて勇氣を持って進むように、と学生を鼓舞され

ておられます。本学では、探究型、国際英語、ICT（情報通信技術）活用授業の二本柱で教育の実践に取り組んでいます。この考え方は、小・中・高等学校を含め開智学園全体に共通する教育姿勢になっています。開智とは、「智の扉を開き、広く知識を修得し、未来を創造する」というリベラルアーツ教育を示しますが、この開智と、地域社会・国際社会に貢献する人材を育成する、のが本学の教育方針です。小規模の大学だからこそできる探究型教育では、問題解決型授業（PBL型授業）

に決めました。大学三年の時に東京オリピックがあり、バレーボールのブルガリア選手担当で学生通訳を務めた思い出があります。今、一年生に「グローバル社会を生きる」をテーマに授業を持っています。本学には、一三か国からの留学生が在籍していますので、私の授業にも留学生が混在しています。ですので、外国の人たちと一緒に地球全体のことを考えていくような人材の育成が大切だと考えています」

——今、地球環境が悪化の一途をたどっていますか。

「一〇月に関東に襲った台風一九号の例をみても分かるように、海水温度が上昇しています。海に囲まれた日本は沈没してしまうのでは、と心配しています。気候変動も激しく、日本には四季があったのに、それが変わりつつあるのが現状です。人間が好き勝手なことをしてきて、どこかで歯止めをかけなければならぬのに、環境問題の話し合いの場では、各国のエゴが剥き出しになっています。地球市民として一人ひとりが自分の問題として地球を守っていく姿勢が必要と感じていますし、実際に行動していくことが大事だと思います」

小規模だからできる探究型教育



■ 開智国際大学 学長

■ 北垣 日出子
Kitagaki Hideko

や双方向型授業（PBL授業）を通して、学生が身に付けたスキルは何か、という学生主体の学びを行っています」

——今も教壇に立たれていますが、ご専門は。

「分野としては国際秘書学や国際コミュニケーションですが、もともとは英語です。私は戦中生まれですが、小学三年生のときに父親がフルブライト一期生として米国に留学しました。帰国後、父から米国での話を聞いたり、写真を見せてもらいながら、当時はテレビなど無い時代でしたから、外国には自分の知らない様々な世界があるんだ、と外国に非常に興味を持つようになりました。それが切っ掛けになって、英語の勉強が大事になると思い、大学で英語学を学ぶこと